

---

# 俺と彼女の四重奏

高良あくあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と彼女の四重奏

### 【Zコード】

N6137Y

### 【作者名】

高良あくあ

### 【あらすじ】

明桜高校一年、月峰涼夜<sup>つきみね りょうや</sup>。天才的な記憶力を誇る彼は放課後、一人の女生徒とずっと一緒にいるらしい。え、それってもしかして…！？「別にそういう関係では無いのですよ」当然立つてしまつた噂を微笑んで否定する彼女は、大金持ちの家のお嬢様、高崎美絵<sup>みえ</sup>。けれど、彼女にはとある秘密があった。涼夜と一人きりになつた瞬間、美絵はその態度を変える。そう、実は彼女、だつたのです！　タイトルは『四重奏』と書いて『カルテツ』と読みます。

## 第一話 色々と事情があるのです。

呆氣無く失つた夢は、俺の日常を大幅に変えてしまつただけであつて、それから何年経とうと世界は何事も無かつたかのように回つていた。当事者である俺もまた、空いてしまつた穴から目を逸らすように、それまでの日々を繰り返そうとした。

けれど、どう足搔こうと戻らないものは戻らない。柱を失えば後は倒れるだけで、俺もまたゆっくりと、けれど確実に、壊れようとしていた。

そんな時に、俺は彼女に出会つたのだ。

いや 正しくは、『彼女たち』に。

＊＊＊

「いいか、理数科目といつものがこの世に存在する」ことがそもそもの間違いなのだよ。分かるだらつ？」

「いや、全然」

即答すると、彼女……文音は呆れるように首を横に振つた。

「分かつていいな、君は。理科も数学も、一体人生のどこで使うといつのかね？ 君は買い物をするときにわざわざ因数分解をするのか？ 普通はしないだろ、個数を数えたいのなら小学校の加減乗除で十分事足りる。暗算が苦手なら電卓も携帯もある。私たち自身が機械になる必要はどこにもないだろ。それに君は、何かを見るたびにいちいちその原理を思い浮かべるのか？ 林檎が木から落ちた、それは地球には重力があるからだ。なるほど、それを解明するのは確かに大事なことだろ。だがそれは私たちが知るべきこと

なのか？ 例えばその林檎が欲しかったのだとして、林檎を手に入れるために必要なのは『林檎が木から落ちた』という事実だろう。重力の存在など知らずとも人は生きていける、それは遙か昔に生きた人々が証明している。ならばそんな無駄なことを覚えずとも、私たちには他にやるべきことがあるのではないか！」「勉強することそのものが大事なんだ、とかよく言わないか？」

半眼で突っ込むと、彼女は鼻を鳴らす。

「役に立たないことを勉強することのどこが大事なのかね」「将来役に立つかもしれないだろ、思わぬところで」「ふん、流石学年トップ様は余裕だな」「何も捻くれなくても……」

嘆息すると、不機嫌そうだった文音はくすりと笑った。

「捻くれてなどいなさい、褒めているだけだ」「その口調は絶対褒めてない」「む……ばれたか」

真っ直ぐ伸びた黒髪はボニー・テールで、制服はきつちり真面目に着こなして。無駄に男らしい口調で、しかしづつが悪そうに頬を赤らめる姿は、どこからどう見ても可愛らしい少女である。

……文音は、なあ。黙つてさえ、いればなあ。

「今、とてつも無く失礼なことを思わなかつたか？」涼夜

「いや、別に？」

表情を変えずに肩を竦め、俺は話を元に戻す。

「でも文音だつて、別に成績悪いわけじゃないだろ？ 現国も古典も九十九点。英語は九十八点、倫理は九十七点。理系科目だつて、雪音に理系脳を持つて行かれたとはいへ平均は取れてるし……どこのが不満なんだよ」

「強いて言つならば、全教科満点の君にそれを言われる」ことが激しく不満だな。この化物め」

今度は向こうが半眼。……いや、うん。

「……事実だから何も言い返せないけどさ。でも、取れるものは取れるんだから仕方ないだろ」

「嫌味か貴様つ！」

「はいはい、突然キレない」

冷静そうに見えて、何気に三姉妹の中で一番短気なのが文音である。クラスこそ別だが、一ヶ月も一緒に過ごしていると俺もすっかり慣れてしまつて、この程度のことでは動じない。

「顔に出でているぞ、涼夜。言つておくが君のその冷静さはいくらなんでも異常だ。それで、絶対記憶能力だつたか？ 君が持つてているのは」

「そんな大層なものじゃないけどな」

「む、そうなのか？」

首を傾げる文音に、苦笑を返す。俺の場合はちょっと人より記憶力が良いだけであつて、見ただけで完璧に暗記出来るレベルではない。……前に説明した気がするんだけどな。いや、あれは文音じやなかつたか？ 同じ顔だからややこしいよなあ。

「俺はそこまで凄くないよ。その証拠に、中学時代はせいぜい学年

で三番くらいだったし、百点も全部じゃなかつたし

「まずは基準がおかしいことに気づけ。だが、なら何故高校になって急にトップを死守するようになったのかね？ 記憶力が急に進化でもしたのか？」

「するか馬鹿。……色々あつたんだよ、俺にも」

必死に打ち込んでいたものが突然消えて、俺に出来ることと言つたら勉強くらいになつてしまつたから。自分が存在する意味を見失いたくなくて、自分に期待する人にこれ以上失望されるのが怖くて、必死だつたのだ。

そんな、言いよつのない感情が顔に出てしまつたのか……文音が氣まずそつに俯く。

「……すまない」

「何で謝るんだよ」

対し、俺は苦笑。

「おかげでここに合格出来たし、悪いことばかりじゃないよ。だろ？」

「つまり、悪いこともあつたのだつ？」

「あー……」

ますます俯く文音。俺もそれ以上言い訳は出来ず、目を逸らしかけ……彼女の瞳の端に、静かに留まり光る雫に気づいた。

「あーもう、何で文音が泣くんだ」

「な、泣いてなど……いない」

「ダウト。声震えてる」

突っ込むと、文音は諦めたのか、隠すのを止めて顔を上げる。

「だつて……私は、知っていたのに」「え？」

その言葉に、俺は目を見開いた。

「あれ？ 俺、文音に話したつけ」

「他の二人は恐らく知らないが、私には一度話してくれただろう。出会つてすぐの、君がやさぐれていた時期に」

「まだ俺がお前らの見分け方を知らなかつた頃、か。……そつか。あれ、文音だつたのか」

何とも言えない感情に襲われ、俺は目を閉じる。

ある意味、文音で良かつたと言つべきだらうか。話をした相手がこいつの妹たち 雪音や琴音ことねであつたとしたら、俺は恐らく余すところなく語らなければいけなかつただろう。傷口を押し広げて。それはそれで荒療治にもなつたかもしれないが、それにしても荒すぎる。

その点、文音は優しい。彼女は何も訊かないでいてくれた。俺が感情のまま吐き出した言葉、それだけを真剣に聴いていてくれた。そのくせ何か他人の辛さ、他人の痛みだけは共有出来てしまつて、そうして他人のために泣くのだ。見方によつては短所とも取れる、まったく損な性格である。

だが、それに助けられたのもまた、事実だつたから。

何か言おう、と口を開く。けれど言葉が見つからず、閉じる。互いにそれを数回繰り返したせいで、嫌では無いが居心地の悪い、妙な沈黙が流れていった。

それを破つたのは、ぽつん、という水の音。

「あ……ほり、文音が泣くから雨降ってきた」  
「それは私のせいなのかね、君つ」

僅かに赤くなつた目で、文音は上目遣いに俺を睨む。  
けれどその直後、彼女はまるで花が咲くように、嬉しそうに微笑  
んだのだった。

## 第一話 色々と事情があるのです。（後書き）

そこまでお久しぶり、でも無いでしょうか。初めましての方は初めまして。高良あくあです。

メイン連載である『幸福の在り処』の執筆もしなければいけないところに、勢いで新作を始めてしました。

というわけで、『俺と彼女の四重奏』です。あらすじにもあります、『四重奏』と書いて『カルテット』と読みます。

この第一話は若干シリアル寄りですが、説明回である1話・2話を乗り越えたら後はひたすらコメディ時々シリアルでやつてこいつと 思います。楽しんで頂けたら幸いです。

## 第二話 彼女が一番厄介です。

「涼夜君、昨日文音のこと泣かせたでしょ？」「

怒ったようにそう問い合わせてきたのは、雪音だつた。文音と全く同じ顔だが、浮かべる表情は文音の凛々しいものとは違ひ穏やかでおつとりしたもの。長い黒髪も、緩く三つ編みにしてあつた。

「……ねえ、聴いてる？ 涼夜君」

「ああ、聴いてる。人って同じ顔しても髪型と表情だけでだいぶ  
変わるものだよな」

物凄く呆れた表情を向けられた。仕方がないので俺は会話に戻る。

「別に泣かせたわけじゃないんだけどな、向こうが勝手に泣いたと  
いうか……」

「あの文音が勝手に泣くわけないでしょ」

即答。ふむ、ここは流石妹と言つべきか。やつぱり何だかんだ言つても姉のことはよく分かっているんだな……などと思つたのも束の間。

「だつてあの子、少せい頃にわたしがわざと……いえ、いひかりあの子の宝物壊しちゃつても泣くどこのか逆ギレしたのよ～？」  
「それは俺も逆ギレする」

というか何してるんだ、こいつは。

「で、何があつたのー？」

「いや、だから別に何も……あ、そういうえば雪音つて理数得意だよな」

あまり触れてほしい」とは無かつたので、俺は強引に話を逸らす。まあ、そのうち雪音にも、そして琴音にも話すことになるだらうか……それでも、自分から話すのはやつぱり嫌だつたし。雪音もやつぱり本気で訊いているわけではなかつたのか、急な話題転換にあつやつ乗つてくる。

「得意よ～、大得意！ なあに、そんな話もしたの～？ 昨日。文音つてば氣まずそうにして、全然教えてくれなくて」「あーうん……どうちかといつと、文音が一方的に語つてたかな。いかに理数が人生に不要か、熱く語つてた」

「あらあら」

眩しいほど完璧な笑顔を浮かべる雪音。……感じる寒気。まさに絶対零度、である。

「文音つてば、困つたわね～。どうしてくれようかしらー」

「……琴音ならともかく、雪音に文句を言つ資格は無こと思つんだけど」

「やつぱり私物破壊かしらー。でもあの子綺麗好きだから、部屋をぐつぐつぐちやに散らかしておくだけでも効果ありそうよね～？」

「いや、だから雪音だつて文系科目は悲惨つていうか、平均に屈いてすらいないとこつかそれビンの赤点ギリギリとこつか」

「何か言つた～？ 涼夜君」

「……何でも無いです」

笑顔で振り向かれると、まだ命が惜しい俺は否定するしかないわけ。……「めん文音。でも妹の教育はしっかりしてくれ、頼むから。

「大体ねー、うちの学校のテストが難しそうのが悪いのよ？ わたしは悪くないの～」

「そういうのを責任転嫁って言つと思うんだけど……仮にも県内有数の進学校つてことになつてるんだから、当然と言えば当然じゃないか？」

「他人事みたいに言つのね～？」

困つたように苦笑する雪音。……騙されるな、俺。腹黒なこいつのことだ、実は困つてなんかないに決まつている。

確かに雪音の言つ通り。ここ、私立明桜高校は、県内でも有数のというか、言つてしまえばぶつちぎりでトップの学力を誇る進学校である。国公立どころか海外の有名大学にも多数の合格者を出し、更に卒業生の半分はそのまま国内トップレベルである明桜大学に進学する。

そんな事情のせいか、授業も定期テストの内容もかなり高レベルであり、中学時代はトップだったのにここでは下から数えた方が早い、など日常茶飯事だった。他校で天才と呼ばれるレベルが、明桜では平均　　その事実に衝撃を受けた生徒も多い。

……まあ、昨日の文音との会話からも分かるように、俺はそこまで困つてはいないわけだが。というか、全く困つていない。

「涼夜君。顔を見れば、何を考えているかくらい分かるのよ～？」  
「何だつてー俺が今日の夕食のことを考えていると見抜くとはお主なかなかやるなー」

「棒読みは止めましょう～？」

ジト目で俺を睨み、雪音は諦めたように嘆息する。

「まあ、涼夜君が凄いのは知っているし、涼夜君の頑張りの結果だから、怒りはしないけど……トップで合格した、っていう事實を妬むくらい、良いわよね～？」

「雪音。怖いから」

田を逸らしつつ、学校繫がりでふと思い出す。

やたら頭が良いという事情から、『明桜高校卒業』や『明桜大学卒業』の肩書は金持ちの間では一種のステータスになつているらしい。もちろん金で入学出来るほど明桜は甘くは無いが、小さい頃から厳しく育てられている彼らにとっては問題ないことのようで、どこのクラスも三分の一は金持ちだつたりする。

そして、その中でも一番の財力と権力を持っているらしいのが、文音や雪音……そして琴音の家である、らしかつた。俺はその辺りの事情には疎いから、よく知らないけど。

「……これが金持ち、ねえ」

思わず雪音を凝視すると、彼女は居心地悪そうに俺を睨む。

「ねえ、涼夜君。さつきから貴方、わたしに對して失礼すぎないかしらー」

「や、俺が失礼なのはお前ら全員に對してだよ。雪音だけじゃない」「血縁に言つことじゃないわ」

可愛らじく頬を膨らませる雪音に、俺は苦笑。……そり、可愛らしいのだ。何でこいつらこんなに容姿だけは良いんだ。容姿だけは。

「やう言つセリフは、普段自分が俺に何をしているか考えてから言つてくれ」

「わたし、何かしたかしらー？」

「ある意味お前が一番色々してると」

主に俺の時間を根っこぞぎ奪つていつたり、ボケたり。

琴音もボケる上にトラブルメーカーだが、向こうは思いつきで動くため最終的に被害は小さい。ところが雪音はちやっかり腹黒いため厄介なのだ。

ちなみに文音はとこうと、性格はどちらかとこうとシシコミであるはずなのにそもそもその考え方が捻くれているタイプ。よくもまあボケばかり集まつたものである。やはり同じ環境で育つと似るのだろうか。

「だつてわたしたち、そのためによく集まつているんでしょー？」  
涼夜君で……ああ「めんなさい、涼夜君と遊ぶために」

「どつちも変わらないから、それ

ジト目で睨むが、雪音はそんな」と意に介さず口に手を当てて笑う。

「だつてシッコリして大体マジでしょー？」

「違うから」

「えつ、違うのーー？」

はい、滅多にない雪音さんの叫び声入りましたー。

「何でそこまで驚くのかが俺にはちょっと理解できない

「だつてどんなボケにも耐えられる強靭な精神力とそれを快感に変えられるマゾの気質が無いと出来ないじゃないー、シッコリなんて！」

「全国のシッコリの監さんと謝れ。……言つておくけど、俺は好き

でツツ「ハヤつてるわけじゃないから」

「ええ、知つてるわー」

「ハヤつと微笑む雪音にて、俺は嘆息。やっぱり確信犯か、ハヤつ。

「大体、それならボケの奴らだってマジだよ。ツツコまれると分かつていてボケるなんて俺には出来ないな」

「そんなこと言つちやう時点で、涼夜君もボケの皆さんに謝るべきよー？……でも、そつよね。ツツコみ方によつては叩くし、もしかしたら『そういうプレイ』だつて誤解しちやう人もいるかも

「それはない」

「涼夜君が言つたんでしょう？」

「いやあ俺には雪音みたににぶつ飛んだ思考なんてとてもとても

「酷いわ、涼夜君」

頬を膨らませる雪音。文音がやると頭がおかしいんじやないかと心配に思つてしまつよつな行為だが、雪音がやると可愛らしく思えるから不思議だ。

「一体何が違うんだろ? な、同じ顔なのに」

ポツリと呟くと、雪音は一瞬きょとんとした後、嬉しそうに微笑む。

「あらあら、涼夜君つたら頭が良いくせに知らないのね。違うところだけじやない、私たち」

「……悪い意味でね」

高校に入学してからのこと思い出しながら、俺は嘆息したのだった。



## 第一話 彼女が一番厄介です。（後書き）

そんなわけで、説明回」と第一話です。第一話でも話題に出てきた雪音ちゃんが出てきました。次女です。おつとり腹黒です。厄介。

ちなみにこのお話の舞台は基本的に放課後です。ここから何で放課後にこんなどうでもいい話してるの？と疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれません、その辺りは本編で語れればいいなーと思つてたり。基本ノリなのでどうなるか分からぬけれども。

それではまた明日、第二話でお会いしましょ。……多分。だつてまだ書いてすら〜。

## 第二話 それが『三人』の秘密です。

放課後。帰りの挨拶も終え、今週は掃除も無いから帰るかと席を立つ。と、教室の入り口から聞き慣れた声がした。

「こんばんは。月峰君、いらっしゃいますか？」

ただしその口調は、何度聞いても慣れない、優しげで穏やかなもの。教室の入り口に立つ『彼女』の問いに、応対していたクラスメイトは首肯しながら俺を見る。

「月峰一、愛しの高崎さんたかさきが呼んでるぞ」

「愛しのつて……別にそういう関係じゃないんだけどなあ」

嘆息しながら、俺はのんびりと歩み寄つた。走り寄ることが出来ないのは『彼女』も分かっているため、急かしはしない。そして『彼女』の前に着くと、クラスメイトはにやりと笑う。

「照れるなつて。今日もまた放課後一緒になんだ？ 爆発しき」  
「だから違うつて。じゃ、また明日ー」

教室内に声をかけると、残っている生徒からぱらぱらと声が返ってくる。その声を背に受けて廊下に出ながら、俺は『彼女』を見る。

「ツインテール……つてことば、琴音か  
「『』答、です」

べるりと悪戯っぽく舌を出す彼女は、文音や雪音と全く同じ顔。それだけを聽けば、三つ子だと誰もが思うだろう。だが、違う。

「よく分かりましたねえ、月峰さん。『今日は『私だつて』髪型で。……まあ、琴音は髪を見なぐくても分かるかな。『美絵』のとき、楽そうだから」

「あはは、まあ文音や雪音よつは楽ですねー。そこまで口調変わりませんからねー！」

心底樂しそうに笑う琴音。しかしそこで廊下の端から数人の生徒が現れ、琴音は一瞬表情を硬くする。しかしすぐにその表情は、さきまで浮かべていた穏やかな笑顔に変わった。

「でさあー……あつ、みーちゃん！ 今帰り？」

そんな琴音の変化にも気付かず、歩いてきた女生徒たちの一人が琴音に声をかける。みーちゃん、と、彼女の本名に掠りもしない名を呼んで。

しかし琴音は気にした様子も無く、にっこりと。

「いいえ、月峰君にお勉強を教えてもらおうと思つて。どうかなっている教室、ありませんか？」

「それだったら向こうの選択教室空いてたよー」「ありがとうございます」

微笑む琴音に対し、女生徒は何か含みのある笑顔で首を振る。

「いいつていいつて。それよつと、みーちゃんもつまべ考ふるよねー

ー」「あ、それ私も思つた！ 美絵だつて凄く頭良いくせにねー」

「……何のこと、ですか？」

笑顔のまま首を傾げる琴音に対し、彼女たちはなおも盛り上がる。

「放課後に勉強教えてもらひつて、凄くいい口実よねー！ 流石みーちゃんだわ」

「月峰君だつて格好良いしモテるし、ほんとお似合いだよねー！」

「ここまで来て、よつやく俺は彼女たちの言つてることを理解する。……」つりでも、か。

「何度も言つてるけど、俺たち別にそういう関係じゃ」

「月峰君も、照れない照れない。照れたら美絵に悪いでしょー！」

「いや、だから……」

嘆息する俺を見て、くすりと面白そうに、しかし優雅に笑う琴音。「残念ですが、本当に勉強を教えてもらひただけなのですよ。私がなかなか理解しないから、毎口のように付き合つて頂くことになつてしまつて……月峰君の教え方が上手なので、ついつい欲張つてしまふんですね」

困りました、と苦笑する琴音に対し、女生徒たちも頷く。

「分かる分かる、月峰君つて教えるの上手そうだよねー」

「良いなー美絵、あたしも教えてもらひたあーー」

「あなたは彼氏がいないでしょー」

「つさいなー月峰君の話をしてるのー、じゃ、二人とも頑張つてねー！」

嵐のように行くつていく彼女たち。その姿が見えなくなるまで見送つて、琴音は大きく息を吐いた。

「はー……疲れました」

「お疲れ、美絵」

「本気でやめてください月峰さん怒りますよーー！」

きつ、と俺を睨む琴音に、俺は苦笑を返す。

「『めん』『めん』。それにしても、お前らも大変だな。いつそ全部打ち明けちゃえれば良いのに」

「……月峰さんみたいにふーんで済ませちゃう奇麗な人、そうそういないですよー。普通は頭おかしいって思われるものです。三重人格なんて」

不意に、琴音の声が低くなつた。俺はしまつた、と僅かに後悔するが、その程度で引いていては俺たちの関係は、互いに爆弾を抱えていて、会話の中でうつかり触れてしまつような危うい関係は成り立たないから。

彼女……高崎美絵は、三重人格者である。彼女の中には常に、『長女』である文音、『次女』である雪音、そして『三女』である琴音の三人がいた。

周りに知られている、人当たりの良いお嬢様である『美絵』の人格は、彼女たちが意識して作り上げたもの。自分の家族、そして俺以外の前では、彼女は『美絵』として暮らしていた。

「俺は面白いと思うけどなあ」

「だからあー、そういう変人は珍しいんですってばー……つとと

再び通りかかる生徒に、琴音は一瞬で『美絵』の表情を浮かべる。

「……とりあえず、空き教室に行こいつか。早く勉強始めなきゃいけないし」

「そうですね、月峰君」

俺にとつては違和感バリバリの『美絵』を連れて空き教室に辿り着くと、琴音に戻った彼女は再び嘆息。

「だから、疲れるならやらなければいいのに」

「そういう問題じゃないんです……大体、『美絵』は十年以上やり続けていることですから、疲れたりしないんですよ！ 切り替えが疲れるんです！ まったく、本来なら月峰さんの前でも『美絵』でいるはずだったのに！」

「まあそれについては雪音と琴音が悪い」

初めて会ったときの『彼女』は、完璧に『美絵』だった。あれが三人の内誰だったのかは、今も知らない。クラスが違ったからもう会うことは無いだろうと、あつたとしても廊下ですれ違う程度だろうと、気にも止めていなかつた。

しばらくして再会したのは、『美絵』として振る舞う文音だった。一昨日の会話の通り、当時はまだやさぐれていた俺は文音に八つ当たりし、自分の身に起きた出来事を全て打ち明けてしまつた。

その後、休日に町の中で出合つたのが雪音だった。『美絵』ではない彼女は、迷つてしまつたと苦笑しながら俺に道を訊ねてきた。学校とはまるで違う彼女に驚きながらも、俺は見て見ぬふりをした。そして学校に行くと、そこには『美絵』の皮を被る雪音がいた。見ているうちに、俺はぼんやりと気付いてしまつたのだ。

別人だと。俺が過去を話した彼女と、休日に出会つた彼女と、

そして今見ている彼女は……完璧に別人であると。

それからは早かつた。『美絵』を呼び出し、訊ねたのだ。責める気も、他の生徒に話す気も無かつた。ただ、知りたくて。

俺の話を聴いた彼女は、『美絵』とは違う微笑みを浮かべて、ゆっくりと頷いたのだ。

『凄い観察力ねー、貴方。その通りよ~』

そうして雪音は語つた。自分たちは『高崎美絵』の身体に宿つた、それぞれ別の人格であると。

彼女たちは眠るたびに入れ替わり、次に表に出る人格は目覚めるまで彼女たち自身にすら分からぬ。眠っている間だけ会話が出来る彼女たちは、その間に『美絵』を作り上げたのだ。

「月峰さん？ 何をぼんやりしてんですかー！」

そんな琴音の声で、俺は現実に引き戻された。

「いや、俺が何でここにいるのか回想を

「そんなの良いからさつさと教えてくださいー 一次関数苦手なん

です私

「口実じゃなかつたのか……大体、琴音は文理ともそこそこ出来るだろ」

そこそこ、どうとか全教科八十点台は取れているレベルである。テストの日は琴音が出ていると一番安全らしい。逆に一番危ないのは雪音が出た時で、その時は文系科目の点数が壊滅的になるためテスト前日は三人で恐怖しているらしい。アホだこいつら。

「ところで私思つんですけど、部室一つ奪いません?」

「そこ、日常会話の延長のように自然な口調で物騒なことを言わな  
い。大体何部だよ」

「部活動まででっちら上げる必要はありませんよ、各所を脅して部室  
だけ貰えれば。だつて放課後の度に空き教室探すの面倒じゃないで  
すかー」

「お前らが俺を拘束しなければ済む話なんだけどな  
「だつて見張つてなきゃいけないじゃないですか!」

「そう。雪音に全て聴いた翌日、俺の前に現れるなり問答無用で人  
のいない教室に拉致したのが、他でもない琴音である。

『秘密を知られたからには生かしてはおけません!』と言いたいと  
ころですけど、私は優しいので監視程度で許してあげます! 放課  
後の貴方に自由は無いと思つてください!』

「そんなわけのわからない理由から、素に戻った三人と毎日駄弁る  
日々が始まったのだ。話を聴いた雪音は何故か琴音以上に乗り気。  
唯一の良心たる文音すら、反対はしなかつた。

「別に見張らなくとも、お前らのことは言わないつて。言つても俺  
にメリツト無いし」

「メリツトがあつたら言つんですか!」

「割と」

「やつぱり駄目です見張ります! 卒業まで見張つてやります!」

叫ぶ琴音を見ながら、俺は嘆息した。

文音も雪音も、琴音も嫌いではないけれど。

……それでも彼女と噂が立つことを好ましく思わない俺が、確か

ここを感じながら。

## 第三話 それが『三人』の秘密です。（後書き）

ここまで来てやつとプロローグが終わつた感じでしょうか。  
といつわけで、軽く人物の説明・解説などしておきましょ。

月峰涼夜  
つきみね りょうや

主人公。語り手。高校一年生。

天才的な頭脳を持つ、どこか冷めたところのある少年です。その洞察力や観察力から『美絵』の三姉妹に目をつけられてしまい、共に放課後を過ごす仲になります。

基本的に冷静であまり叫ばない彼に、果たしてツツコミが務まるのでしようか。

高崎美絵  
たかさき みえ

文音・雪音・琴音の三姉妹が他の生徒の前で出す、『表』の人格。常に敬語で柔らかな笑顔を浮かべる、人当たりの良い『お嬢様』な性格。

文音  
あやね

『美絵』の長女。真面目だけど短気。文系。理数滅べ。

雪音  
ゆきね

『美絵』の次女。おつとり腹黒。理系。文系滅べ。

琴音  
ことね

『美絵』の三女。ハイテンション敬語。文理ともいける劣化版涼夜。

……説明が酷いですがまあそこは気にしない。

というわけで、ここからは涼夜と三人の内誰か一人がひたすら雑談を繰り広げるコメディ多めなお話となります。たまにシリアスもあるけれども！

次回もなるべく早くお届けできるよう頑張りますので、たのしみにしていただければ幸いです。

ではでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6137y/>

俺と彼女の四重奏

2011年11月20日16時42分発行